

## 第4回これからの災害支援を考える北海道フォーラム —災害から5年、あの時、今まで、そしてこれから— 開催レポート

日時:2023年9月5日(火)10:00~17:00

場所:市民活動プラザ星園(札幌市中央区南8条西2丁目)

### はじめに

2023年9月5日、第4回これからの災害支援を考える北海道フォーラムを開催いたしました。参加者のみなさま、並びに登壇者の方々のご協力のおかげで、学びの多いフォーラムとなりました。ありがとうございました。

開催当日は北海道では大雨警報が発令され、JR運休などが相次ぎ、全道域から集まるスタッフが集合時間に間に合わないという事態からスタートした今回。北海道内では道路などが冠水するほどの大雨が降る地域もあったにも関わらず、札幌市内は季節外れの夏日予報で、15時頃に28.6℃を記録。元高等学校だった会場には、当然の如くクーラーはなく、かき集められるだけかき集めた送風機で対応することに。試される北の大地で試されるフォーラムが始まりました。

オンラインでは東北、関東、中部、中国、九州の各地方からご参加いただき、会場には大雨を乗り越えて、北海道各地だけでなく宮城県や愛知県から会場に駆けつけてくださった方も。当フォーラムは、登壇者・スタッフを含め83名の学びと交流の場となりました。会場では異様な暑さの中、参加者のみなさまが登壇者の言葉に真剣に聞き入り、詳細にメモを取られる様子から、災害時への円滑な支援体制を深く考えていることが、登壇者並びに運営スタッフにも伝わってきました。また、休憩時間も参加者、登壇者、スタッフ入り乱れた活発な交流が行われ、話が尽きることはないようでした。参加された方々からは、平時の取り組みや顔の見える連携の大切さについての感想を多く頂きました。一部、音声が届き取り辛いお席があったようでした。申し訳ありませんでした。今後益々精進いたします。また、当フォーラムの詳細は、プログラムごとにくきたサポ幹事団体のメンバーからご報告いたします。気温も心も暑い(熱い)1日をご確認ください。

また、フォーラムの冒頭には「災害支援ネットワークおかやま」と「北の国災害サポートチーム」の両者において「災害発生時等における連携・協力に関する協定書」の締結式が行われました。この協定により、岡山と北海道の災害中間支援組織間の平時からの連携が強化されます。

北海道は釧路・十勝沖の地震・津波、有珠山の噴火などの危険に加え、近年は台風、大雨による災害も多発しています。私たちは、災害や地域の相違点を理解しながら、多様な主体間の円滑な連携を持ち、被災された方々の1日も早い生活再建へ向けた活動を支援します。今後ともみなさまのご支援、ご協力をお願いいたします。



## クロストーク (10:55~12:30)

### 災害から5年、あの時、今まで、そしてこれから

『これからの災害支援を考える～北海道フォーラム～』最初のプログラムは、クロストークでした。

聞き手・進行の北の国災害サポートチーム・草野竹史(NPO法人ezorock代表)の岡山と北海道のきびだんごの違いという、意外な視点からのスタートで会場の空気が一転和やかになったところで、各トーカーからの自己紹介と話題提供、後半では課題を掘り下げ深めていきました。

北海道社会福祉協議会の一戸航瓶さん。5年前は防災にも関わりなく、民間企業でブラックアウトを体験しました。3年後道社協に入り、今はボランティアセンター担当となっています。北海道災害ボランティアセンターは平時から道レベルで機能(ネットワーク形成・運営マニュアル作成・人材育成・地域防災計画への災害ボランティアの位置づけ促進等)を整備していること、受援力が重要で、引き続き北海道の三者連携を進めていきたいという話がありました。



北の国災害サポートチームでコーディネーターを務める宮本奏(NPO法人きたのわ)も、5年前は災害に関わっていなかったとのこと。その後、北海道NPOサポートセンターの声掛けで関わるようになり、現在に至ります。宮本からは、広さや小規模な自治体が多い等の北海道の特性、北の国災害サポートチームのこれまでの活動や、ネットワーク体であることを大切にしている等の話がありました。

倉敷市社会福祉協議会の椿原恵さんは、熊本地震等に関わり、現在の災害ケースマネジメント等の個別支援の活動に至った方です。経験から見えた課題として、①個別支援会議で、民間の信頼性をどう確保・担保していくのか。②住まいの確保の伴走支援で例えば移住があったとしたら、町<市<県の重層性も必要になってくること。③国の支援体制を使わないと支援格差が大きくなることなどの話がありました。

災害支援ネットワークおかやま世話人で、NPO法人岡山NPOセンターの石原達也さんは、熊本地震等を経てネットワーク構築に動いていた矢先、平成30年7月豪雨にあったそうです。石原さんからは、一緒に平時から取り組んでいる経験が重要で、何かあった時に一緒にやろうという仲間がいるかどうかが大切との話がありました。価値観等の相互理解が一番重要なんだけど、それが一番難しい。だからこそ、平時からの対話が必要だということです。

石原さんから出された①災害ボランティアセンターは誰が運営するのがいいの？②国の制度は色々あるが、



使わない市町村もある。実は、1人の専門家がいればいいのかも。③どうして未だに避難所は学校なの？④なぜ、ハザードマップで真っ赤なところに、今でも住んでるの？ という「あらためて問い直す」とした内容に、集まった多くの方が大きく頷いていました。

トーカーの皆さんが口にしていたのは“平場から顔の見える関係から、価値観を共有できる関係へ”という言葉。土業の方も含め、様々な方との対話の場を重ねていきたいと思ったクロストークでした。

## ワークショップ (13:30~16:30)

### 「つながりは備え！次の災害に備えた被災者支援の学び」

午後は市民活動プラザ星園の活動室に8つのグループを作り、少しゆったりした雰囲気で開催されました。進行は北の国災害サポートチームの篠原辰二(一般社団法人WellbeDesign)が務め、まずは水害と地震それぞれについて岡山NPOセンターの詩叶純子さんと北の国災害サポートチームの熊谷雅之(石狩思いやりの心届け隊)より事例提供と、全国災害ボランティア支援団体ネットワークの明城徹也さんに最近の支援事例を紹介していただきました。

同じ自然災害と言っても水害と地震では被害の状況も支援のあり方もずいぶん異なります。詩叶さんのお話によると、同じ水害でも外水氾濫によるものか、内水氾濫によるものかで大きく異なります。前者は被害の状況がわかりやすく支援が受けやすいです。ただ地域住民の大多数が一定期間域外で暮らさなければならず、コミュニティが壊れるという問題があります。そしてそれを繋ぐという支援が生まれます。一方、後者は家の内外で被害が見えづらく、実際には厳しい生活を強いられるにもかかわらず、支援を受けないままに長期間過ごすことも起き得ます。熊谷からの事例提供で、地震では更に被害の状況がわからない事も共有されました。一見して大きな被害を受けて無さそうな場合でも、例えばキッチンが動いて排水が溢れたり、漏れたりすることもあります。これに加えて北海道特有の問題もあります。例えば集合煙突やホームタンクの破損の問題です。この他、生業支援(農業支援)やセルフビルディングの課題などもお聞きしました。これらの事例は被災者に一歩踏み込むことの必要性を学ぶものだと思います。

次にグループワークに入りました。グループワークは篠原より水害と地震それぞれ2つずつ、合計4つの状況設定があり、それをグループ毎に1テーマについて検討するものです。各グループは水害や地震により被災した地域に情報共有会議を起ち上げ、そこにたまたま集まった支援者たちが、課題や支援について情報を共有し、適切な支援や活動に結び付けるといった想定です。最初にアイデアを出し合い、次にこれを実際に誰がそれをできるかを話し合いました。ざっくりとした状況設定だったにもかかわらず、参加者は活発に意見交換されていました。

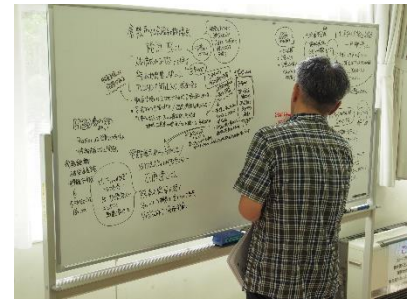
ワークショップを終えて情報を繋ぐことの大切さを学んだと思います。繋がることで生み出される支援もあることがわかりました。繋がる意識は現場の支援者にとっても大きな力になります。午前中のクロストークに登壇いただいた椿原さんからは、「細いネットワークをたくさん持つておくことが何かの時に役立つ」とコメントがあり、改めて平時の活動のポイントを知らされました。明城さんからは「災害特性/地域特性/過去事例を皆で考えることが大切ということを感じたフォーラムでした。是非、他のところでも広めたい。」というコメントを貰いました。

最後に篠原から「明日で胆振東部地震から5年になります。5年前の今日ここでこういう話し合いができていたら、5年前の明日とは絶対違う。もっともっというんな支援ができたり、想いを寄せるだけでなく形にすることができるかもしれない。こういうネットワーク作りやケーススタディをやっていく中で、力を蓄えることができると思っています。」と、力強い言葉があり、ワークショップは終了しました。



## 会場のように・ご協賛社さまの展示から

熱のこもったクロストークが展開された午前部の部、この中でクールにポイントをまとめ上げるグラフィックを担当したのが溝渕清彦さん。次々と繰り出されるトーカーからのホットワードを白板2枚いっぱいには展開されていきました。午後からご参加の方にもその場の雰囲気が伝わるかのようなグラフィックは会場前の廊下に展示され、休憩中にスナップする参加者の姿もありました。様々な場面で目にするようになったグラフィック、災害支援の場でも情報共有のツールとして大きな力を持つことは、平成30年北海道胆振東部地震の情報共有会議の経験でも実感した所です。



会場内でひととき大きな機材が目を引きましたが、その正体は「かくだい君neo」と名付けられたポスタープリンター。本フォーラムへ昨年からお協賛いただいているエム・ビー・エス株式会社様の製品です。会場にお越し頂いた札幌営業所の大場行洋さんにお伺いすると、かくだい君のポイントはパソコンが無くてもスマホから直接プリントできたり、内蔵のスキャナーで手元の原稿を読み取るだけで最大A0サイズまで拡大プリントが可能とのこと。しかも、感熱記録方式の採用でインクタンクを必要とせずプリントできるので、ベタ塗り原稿の印刷でもインク代の心配はないとの事です。反転印刷の機能もあり大きな白抜き文字の掲示物をラクラク制作でき、災害発生時の環境下で誰でも読みやすく情報を得られるのではないかと感じました。エム・ビー・エス株式会社様のホームページは <https://www.mbsnet.co.jp>。「かくだい君neo」に興味を持たれた方はぜひご確認を。



フォーラムのクロージングでは、北の国災害サポートチームの今後の事業について各担当者から説明を行いました。10月14日～15日に石狩市のRVパークいしかりFIELDで開催する「アウトドアで災害時対応!？」と題したイベントは、災害時に役立つアウトドアの知恵とストレスケア、特殊機械を使った支援をキャンプを通じて学べる体験型研修です。



また、4年目を迎えるオンライン研修「被災者支援の多様な視点を学ぶきたサポ研修会」の開催もこの場で発表されました。北の国災害サポートチームはこれらの研修も通じて引き続き多様な組織・機関との連携構築を進めながら、被災者支援への理解促進に努めていきます。